

# 天駄韋の記

劇作家 岡部耕大

13

城山の麓に、お寺「浄土寺」がある。星鹿の祖母の家の菩提寺である。祖母はよくお寺へお参りをしていた。明治18年の生まれである。昭和44年まで生きた。享年84歳であった。「精霊流し」のおぼはのモデルである。私の少年時代に浄土寺に幼稚園ができた。才礎頭を傾けて、グループの後ろに写っている私の写真が残っている。父もグループの離れにネクタイを締めて写

っている。

父は島根県隠岐の島の生まれである。いまでも立派な家があり、槍や刀が飾ってある。あの家は隠岐造りというそうである。庭には大木があり、隠岐植物が茂っている。あの家に、一人で泊

## 「兵隊手帳」に思う

が、戸籍では私は六カ月で生まれてきたことになっている。いわゆる、できちゃった婚である。「長崎の鐘」の永井隆も島根県から長崎へやって来て、下宿屋の縁さんと結婚している。永井隆の父と似た境遇に近親感を覚えたのか」と話問したのである。

まる勇氣はない。なぜ、父が隠岐の島を離れて、西の果ての星鹿までもやって来たのか、それはわからない。わかってるのは、父が祖母の旅籠に下宿したことだけである。その下宿屋には母がいた。母も詳しくは語りたがらなかった

でもない関係がある。「なして戦争に行かんかったとや」と父を話ったことがある。「戦争には行つた」と。父はそれだけで口をつぐんだ。子どもは残酷である。「戦争でなぜ死ななかつたのか」と話問したのである。

父の「兵隊手帳」は、いまでも残って我が家の仏壇の引き出しの中にある。私の家内には戦争体験を語ったそうである。私には原爆の悲惨さを語ってくれた。長崎に原爆が落ちて、しばらくして長崎市へ出張したことがあつたらしい。流行歌「長崎の鐘」が流行っていた頃である。父も「懺悔」をしていたのである。懺悔は、どんな懺悔にも値打ちがある。

いまの浄土寺のご住職は香林亮善さんである。亮善和尚には、私の書「無一物即無尺蔵」を送らせていただいた。永井隆が京都大学教授の恩師からお見舞いにもらった書の言葉である。

(松浦市出身)



おかへ・ごうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。